

茨城県青年のつばさ事業

— 参加報告 —

茨城県が主催するこの事業は、明日の茨城を担う青年を海外へ派遣し、国際感覚に富み、広い視野に立つて地域活動を進めることができる人材の育成を図る目的で実施されています。今年度は、茨城県内34人、本市からは飯塚朋美さん、片倉正紀さん、古谷麻美さん、元山瑞穂さんの4人が参加し、8月12日から17日の6日間にかけてタイ王国を訪問しました。ここで参加者からの感想を一つ紹介します。

茨城県青年のつばさ事業に参加して

古谷 麻美

私が青年のつばさ事業に参加した動機の一つに、海外交流に非常に興味・関心があるということが挙げられます。個人旅行では難しい現地青年との交流や、観光地化されていない本当のタイを知ることが目的に、タイの北部に位置するチェンマイで活動してきました。

実際にタイではホームステイや幼稚園・小学校の訪問、現地YMCAスタッフたちとの交流、さらに「植林コース」では、植林やペンキ塗りなどのボランティア活動、「福祉・教育コース」では、ストリートチルドレンの実態、大学訪問、HIV感染者・エイズ患者のためのシェルター施設の視察など様々なことを体験してきました。

今回、私は植林コースに参加し、現地でドラゴンフルーツの苗木を植林しました。現地で活

動するまで、いわゆる「木」を植えるものだと思込んでいました。しかし、実際に植えたのは「果樹」です。タイは日本より南に位置し、気候も亜熱帯気候です。降水量もそれなりにあるので木の成長が早く、それに伴って果実も日本より早い年月でなるのです。つまり、将来伐採されてしまうであろう「木」を植えるより、食べられる実がなり、且つ果樹林となる「実のなる苗木」を植えたほうが良いということだと思います。実際に現地で活動を行うまでこのような考えは全くありませんでした。いかに自分が固定観念にとらわれているかを自覚した瞬間でもありません。

この他にも事前に考えていたこととは全く違ったという点はいくつかあります。訪問前のタイのイメージとしては、きれいではない、舗装された道路は稀である、日本に関しての知識は無く、日本という国さえ知らない、このようなイメージばかり

持っていました。しかし、実際には思ったよりもきれいな道路はほとんどが舗装されている。出会ったタイ人は皆親日的で、言葉も英語より日本語のほうがよく通じるといった感じで、事前のタイのイメージとは全く異なっていたというのが事実でした。

このように様々な体験をしてきたわけですが、その中でも一番印象に残っていることは、現地の人たちの「笑顔」と「挨拶返し」です。彼らから見たら私たちは外国人です。その外国人が現地の人にタイ式の挨拶（手と手を合わせて「サワディーカー」）「こんにちは」をすると笑顔で挨拶を返してくれるのです。日本ではなかなか見られない光景でした。知らない人から挨拶をされても日本人同士では笑顔で挨拶をすることはありません。ましてや外国人から挨拶をされても無視するか、逃げるかで笑顔で挨拶を返すことは無いに等しいでしょう。「挨拶と笑顔」この二つはとても簡単に気持ちのよいものです。しかし、平日頃から事前に実行している人は少ない、そんな日本の現状に少し悲しい思いもしました。

今回、第26期つばさ事業派遣団のキャッチフレーズとして「Hand in hand」



このつばさで自由な空へ」を掲げていきました。手と手を取り合って、タイと日本とで国は違うけれども、手を携えることが出来たら...そんな想いを胸に研修を行ってきました。手と手を取り合って何かをするということは今回の研修だけに限らず、今後も応用できるのでないかと考えております。

「Hand in hand」を胸に行動していれば、自分の心持だけでなく、いい意味で周りにも影響を及ぼすことが出来るのではないかと思います。何かの活動にただ参加するのではなく、みんなを呼び寄せる、さらに何かを企画する。そうすれば手を携えながら輪を広げていくことの大切さを感じることが出来るし、自ら行動を起こすきっかけにもなると考えています。